

# 世田米城跡

## 調査要綱

遺 跡 名：世田米城跡  
所 在 地：気仙郡住田町字火石  
事 業 名：地域連携道路整備事業に伴う緊急発掘調査  
調 査 機 関：(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
委 託 者：沿岸広域振興局土木部 大船渡土木センター  
発掘調査期間：平成 28 年 4 月 8 日～7 月 31 日(予定)  
調査対象面積：9,970 m<sup>2</sup>  
調査担当者：羽柴直人 對馬利彦 酒井野々子



世田米市街の南部に位置する世田米城  
世田米城は通称「下館」とも称される。市街北部には上原館城（通称上館）が存在する。



## 世田米城

世田米城は中世後半頃（15～16 世紀）の城館跡です。日本各地の中世城館のほとんどがそうであるように、文献史料では、世田米城の来歴、城主などは不明瞭です。江戸時代に作成された地誌類にも簡単な記述しかありませんが、城主「浅沼氏」と記されています。

実際の世田米城跡をみますと、西側の区画（本丸と仮称）と東側の区画（二の丸と仮称）から構成されていることが判ります。本丸と二の丸は谷地形と尾根を開削して造った「空堀」で隔てられています。

本丸は南北約 300m、東西約 150mの楕円形の丘陵で、頂部が南北約 90m、東西約 45mの平場に造成されています。この頂部平場が世田米城の中核部分と推測されます。

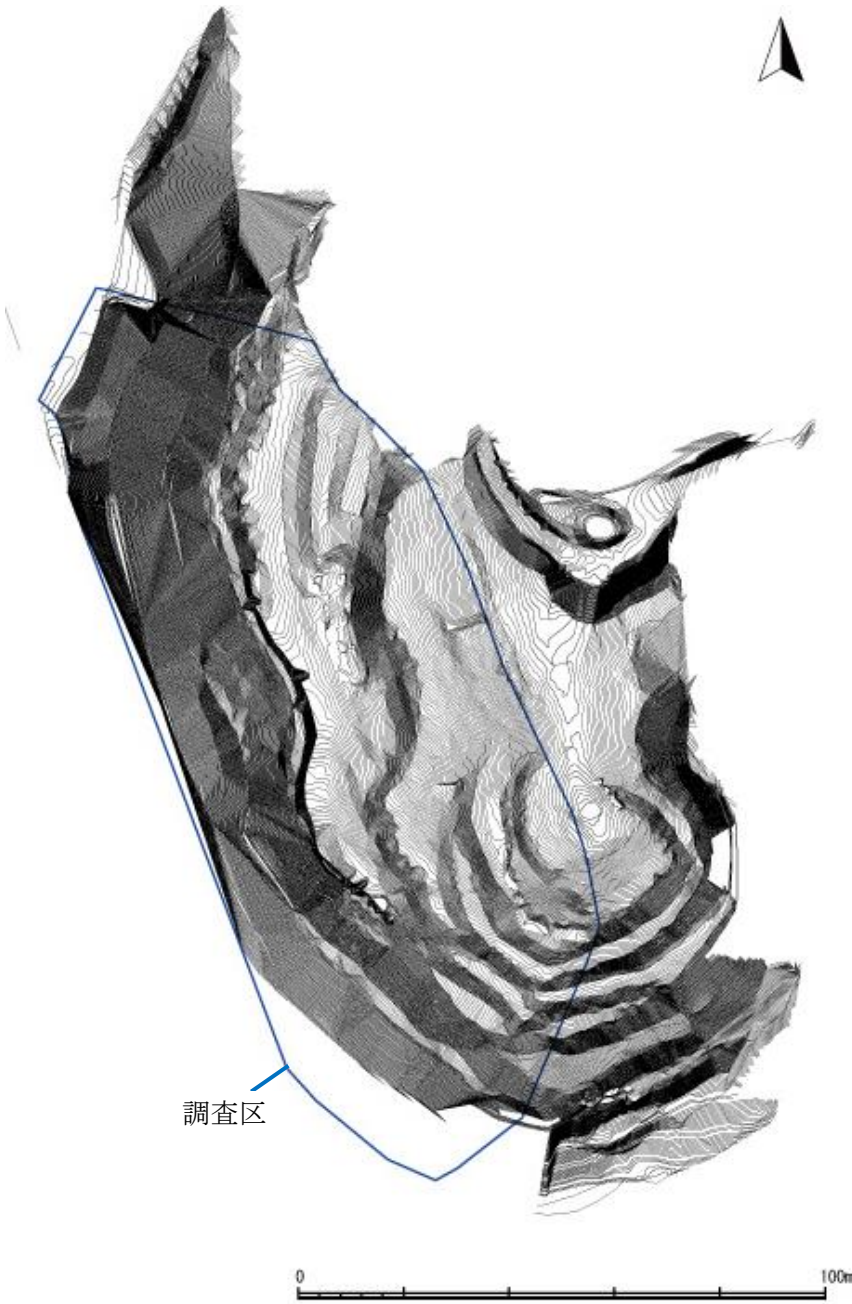
二の丸は南北約 150m、東西は東限が不明瞭ですが約 150mと推測されます。二の丸は平坦に造成されている部分が多く、屋敷地として使用されたと推測されます。



世田米城の概念図 上が南

### 調査の概要

世田米城跡の発掘調査は、国道 340 号の改良工事（地域連携整備事業）により、遺跡の一部が改変されるため、事前の記録保存を目的としておこなっているものです。調査範囲は世田米城の南西部分に相当し、城館の中心部からは、外れた部分です。城館の防御を固めるために構築された「腰曲輪」が約 15ヶ所確認されています。城館の中心部ではないために建物跡や陶磁器は見つかっていませんが、入念に構築された幾段もの「腰曲輪」から、世田米城の防御の硬さ、重要性が窺えます。



仙臺領古城書立之覚 (延宝五年(一六七七)頃書上か)  
 山 世田米村  
 一世田米城 東西五十五間  
 南北三十五間  
 右城主淺沼甲斐同中務米ヶ崎ニテ討死仕候由千  
 葉安房卜依不和タル也

調査範囲内の微細地形測量図 (等高線 10 cm毎)  
 作業途中の未調整の図 本報告書で示す図が本図に優先する。

### 中世の城館のほとんどは「土の城」

日本の中世の城館のほとんどは、石垣や天守閣<sup>てんしゆかく</sup>を有していない。多くの城館は、自然地形の丘陵や台地を削り急斜面「切岸」<sup>きりぎし</sup>を造り、土を掘って「堀」<sup>ほり</sup>を造り、土を盛って「土塁」<sup>どるい</sup>を造るといった、いわば「土の城」とでもいうべきものである。中世城館の研究では、城の平面プランを「縄張り」<sup>なわぼり</sup>と称している。また、堀や土塁、切岸で区画された空間を「曲輪」<sup>くるわ</sup>と称している。

### 「館」と「城」

東北地方では「～館」<sup>たて</sup>と称される中世城館が多く存在する。しかし「世田米城」のように「～城」<sup>じょう</sup>の呼称も地域内でも併存<sup>へいぞん</sup>している。両者には城館として根本的な差異は見いだせず、「館」「城」は呼称の別にすぎないようである。



## 世田米城の機能

世田米城は陸前高田方面から北上する「高田街道」が気仙川と世田米城の丘陵に挟まれる平地の狭隘部<sup>きょうあいぶ</sup>に面して位置します。世田米市街に広がる盆地<sup>てきたいせいりよく</sup>へ敵対勢力の侵入を防ぐには最適のポイントです。世田米城全体の中で、その南西部分に防御のための腰曲輪<sup>こしぐるわ</sup>が入念に構築されていることが見て取れ、高田街道に沿っての南からの侵入を防ぐことを念頭<sup>ねんとう</sup>に入れた機能を有することが明らかです。

世田米城で、陸前高田方面（海岸部）からの勢力の侵入を阻止<sup>そし</sup>するという事は、単に世田米市街を防御するという事に留まりません。世田米を経由して交通路は内陸部各地（江刺、遠野）へと繋が<sup>つな</sup>がっています。世田米城の地点で海岸部の勢力を阻止することは、内陸部の広域的な防衛に大きな関わりがあるのです。内陸部の勢力にとっても世田米城は重要な防衛拠点となります。

そして、また、世田米城の本丸頂部、二の丸には、まとまった広さの平坦面<sup>へいたんめん</sup>も存在します。平坦面には有力者やそれに付随する家臣の屋敷があつたと想定されます。世田米城は、単に合戦の際に機能する交通の要衝<sup>ようしゅう</sup>に設けられた防御施設ではなく、有力者の居住施設<sup>きまじゅうしせつ</sup>でもあり、地域支配の拠点という機能も有していたと推測<sup>すいそく</sup>できます。

### 腰曲輪（こしぐるわ）

腰曲輪は大きな曲輪(平地)から、下がった斜面上に構築される小さな平坦地。腰曲輪の縁辺部を急斜面の「壁」<sup>へき</sup>に加工しているのが特徴である。切岸（壁）を登ってくる敵兵に対する防御の足場としての機能、又は切岸をよじ登り、腰曲輪の平坦面に敵兵が達した場合、敵兵は体を暴露<sup>ぼくろ</sup>することになり、上の曲輪からの防御が容易となる機能もある。

斜面上に腰曲輪を連続して構築すると、敵兵は幾段もの壁を越える動作を繰り返さねばならない。防御側は上段の腰曲輪へ後退しつつ、各段の腰曲輪で敵兵の人員<sup>ぜんじ</sup>を漸次消耗させることが可能である。



腰曲輪での防御イメージ



世田米城の南端部  
腰曲輪が幾段も連なっている